

**J** **apanese text**

2017年 秋/冬号 日本語編

インタビュー

**アーティスト・インタビュー**

**野村萬齋**

——古今東西を軽やかに越境する狂言師

撮影=合田昌弘 ヘアメイク=国府田雅子 (パレル)  
 文=岡崎 香

p.062

ほぼ同時期に生まれ、対で上演されてきた「能」と一緒にユネスコの無形文化遺産に登録されている「狂言」は、人間の習性や本質を笑いとともに写實的に描いた台詞劇。その題材は、中世の庶民の日常や説話だ。

「狂言は、室町時代(14～16世紀)から続くヒューマンコメディ。海外のかたにも非常にわかりやすいと思います。実際、海外公演の際に字幕を出すと、演目によっては日本より観客の反応がよかったり、現代劇の新作か? と聞かれたりします。翻訳するとき、多少古風な言い回しにしても、あえてわかりにくい言葉は使わないせいもありますが、それだけ普遍的な内容なのです」

そう話すのは、映画やTV出演、舞台の演出などでも活躍している狂言師の野村萬齋さん。狂言で培われた優れた身体性や発声、様式美や独自の発想を武器に、古今東西を軽やかに行き来する才人だ。2017年7月には、芸術監督を務める世田谷パブリックシアターの開場20周年を記念して、自身の創作の原点ともなった木下順二の傑作『子午線の祀り』を演出・出演した。

「シェイクスピアの専門家でもあった木下先生が、シェイクスピアの『マクベス』や『ハムレット』にギリシャ悲劇まで集約して、『平家物語』の中に落とし込まれたのが本作品です。中学生の頃、その初演に現代劇の俳優陣に交って出演している父(狂言の師でもある野村万作氏)を見て、僕は“こういうことをするのも、狂言師として当たり前のことなのだろう”と感じました。だからこそ、今の僕がある。この作

品で行われている古典芸能と現代劇、西洋と東洋の融合は、まさに僕が取り組み続けてきたことでもあります」

狂言師の家に生まれ、3歳で初舞台を踏んだ萬齋さんは、父に伴われて小学生の頃から狂言の海外公演を経験。1991年には英国ロンドンでのジャパンフェスティバルに、シェイクスピアの喜劇『ウィンザーの陽気な女房たち』をもとにした新作狂言『法螺侍』(高橋康也台本)で参加した。

「やはりこの経験が大きかったですね。狂言が持つ技術や発想を、もっと世界で有効利用したいと思うようになりました。ロベール・ルパージュやピーター・ブルックといった世界的な演出家が、すでに自身の作品に日本の古典芸能の手法を取り入れていましたし、日本にはまだまだ宝が眠っているじゃないか、僕ら自身が発信しなきゃ、と」

そんな思いを抱いて94年から1年間、ロンドンに留学。ロイヤル・シェイクスピア・カンパニーなどで学び、ワークショップも行った。2001年には、シェイクスピアの『間違いの喜劇』を翻案した『まちがいの狂言』(高橋康也台本)を演出・主演、そのグローバル・バージョンをロンドンのグロブ座でも上演する。

また2010年には世田谷パブリックシアターにて、わずか5人の出演者で演じるシェイクスピアの『マクベス』を構成・演出・主演。無常観と和のテイストに貫かれたこの作品は再演のたびに進化し、日本国内の他、ソウル、ニューヨーク、ルーマニアのシビウ、パリでも上演されている。

そして2011年の東日本大震災を機に、長年の構想に鎮魂と再生の祈りを籠めて初演されたのが『MANSAI ボレロ』。ラヴェルの傑作舞踊音楽『ボレロ』に乗せた、五穀豊穡を願う『三番叟』をベースとした珠玉の独舞だ。オーケストラとも共演し、国内各所で好評を博しているこの作品も、ぜひ世界に発信していきたいと萬齋さんは話す。

「有名な曲ですからね。モーリス・ベジャールのダンスでも知られていますし。僕個人としては、ダンスのステップとは違う“足を運ぶ”という概念が、西洋人にはどう受け止められるのだろう? という点に非常に興味があります。西洋のダンスは通常、音楽を体現するもので、拍=リズムに応じてス

テップを踏むのが一般的です。舞の足の運びは、すり足でもう少しスルスルと繋がったもので、その主眼はリズムを超越して一つの流れを見せることにある。拍は刻んでいないけれども一種の流れを感じるところに、日本人的な“あわい”があるのかもしれない」

邦楽器の味わいにも通じる、その揺蕩う<sup>たゆた</sup>感覚、身を任せる感覚は、「結局はお天道様に身を任せるしかない」農耕民族的なもので、自ら狩りに出て獲物をしとめる狩猟民族とは根本的な違いがあるのかもしれないと言う。

「海外の文化に触れると、そういう違いを実感して面白いですね。そもそも、自分という視点から自分を見ている限り、自分のことはわからない。僕の場合は、いろいろな場所に出て行って、いろいろな人に会うことで、狂言師である自分を外側から見ることもできるし、狂言というホームグラウンドに戻れる幸せを感じることもできるんです」

その揺るぎない根幹としなやかな感性から、何が生み出されていくのだろう？ 萬齋さんのさらなる活躍に期待したい。

#### 野村萬齋（のむら・まんさい）

1966年、東京都出身。狂言師としての活動を軸に、古典芸能と現代劇を融合させた舞台演出や映画やテレビへの出演など、国内外で多彩に活躍。

#### 狂言ござる乃座 56th

狂言『舟渡聲』<sup>ふなわたしこ</sup> 新作狂言『なごりが原』

2017年10月15、19日

国立能楽堂

#### 国立能楽堂 新作狂言

12月22、23日

作：池澤夏樹 演出：野村萬齋

www.ntj.jac.go.jp

#### 『シャンハイムーン』

2018年2月～3月

世田谷パブリックシアター

作：井上ひさし、演出：栗山民也、出演：野村萬齋、広末涼子ほか

setagaya-pt.jp

（左ページ）

2002年より芸術監督を務める世田谷パブリックシアターにて。2017年に開場20周年を迎えた。

（右上）

2001年に英国ロンドンのグローブ座で上演した『まちがいの狂言』より。写真＝万作の会

（下）

2017年4月、劇場の開場20周年を記念して鳳凰の装束で舞った『MANSAI ボレロ』。写真＝細野晋司